

山寺通信4月号

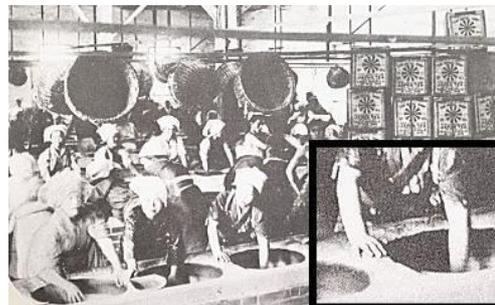
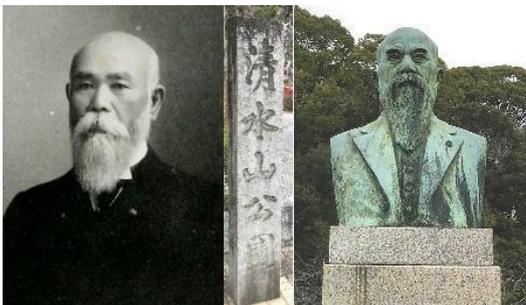
社会全体が、コロナに対して平静になっている感じがします。コロナ慣れとでもいう現象でしょうか。リバウンドの不安もありますが、一般人の生活習慣も落ち着いたものになっていますし、ワクチン接種も始まっています。1918年に起こったスペイン風邪は、飛行機も飛んでいない時代に数か月で全世界の5億人が罹りました。死者数も268万人といわれ、生き残った人が免疫抗体を持ったため終息したと言われていますが、4年後のことです。また、一時的に景気が良くなるといわれていますが、日本ではオリンピック景気を逃しているのだからシビアに見ていかなければならないでしょう。ちなみに日本の死者数は、45万人、コロナは、最近まで8700人です。

とりあえず売上確保ホームページにアウトレットコーナー掲載中 URL <http://www.yamaderakk.co.jp/00ontop.html> 最下

コロナによる大きな変化は、待つのではなく出ていくことです。目先を変えて新製品を積極的に扱うことが必要だと思います。高齢化社会と電子機器高度化による世代ギャップがさらに大きくなり二分化されていくと思われれます。日本茶がアメリカに大量に輸出されていた頃、イギリスでは紅茶を輸入し始めたため、お茶の輸出は減りました。嗜好の変化も大きな問題になります。一番考えなければならないのは、従来の習慣が途切れるとその知識も継承されないことです。つまり掘り起こさなければ復活できないということです。文化は、時代の変化の中では、簡単には継承されませんが、時代にマッチさせれば復活します。

今回「茶」の4月号に大谷嘉兵衛のことを寄稿させていただきました。彼は19歳で和歌山の松坂から横浜に来て親戚の茶商に勤め、さらに23歳の時にはアメリカの商社の支配人になり26万両で420トン買い付けた。それは、南北戦争が終わり日本茶の需要が急激に増えたためでした。3か月仕入れが終わった時、「鳥羽伏見の戦い」が起こった。徳川の支配が終わり明治時代になります。渋沢栄一がパリから帰った時には、徳川が明治政府に代っていたのです。彼は静岡藩で慶喜のもとで働きました。また大谷は、アメリカ大統領に接見して米西戦争の時の関税を戻すように陳情し、海底ケーブルを敷設することを提案しました。常に高額納税者で貴族議員になっていました。茶業に対しても常にトップの位置にいて、世界各国に営業所を持っており品質管理に尽くしました。一方渋沢栄一は、生糸の輸出に尽力しました。二人とも銀行設立等でも同等の働きをしていたのです。大谷は、日清、日露戦争の戦費の寄付で受勲もしています。(例 渋沢栄一の扱った件で当時静岡藩への石高に応じた貸付金予定は、70万両。26万両がとてつもない金額だった)

大谷嘉兵衛の写真胸像(銅像が胸像として復元)静岡市・釜場 熱い釜の中の茶を炒る・明治期四日市の輸出品



明治天皇が買い上げたと言われている温故焼落款+轆轤製法の最初の急須 最後の温故焼末裔3代「石仙」遺作



温故焼 維新政府の重鎮達に人気だった。特に乃木大将は、温故の弟石仙との親交があり窯をよく訪ねた。